

D. コステロ「グリーンバーグによるカントと 現代芸術論における美学の運命」

D. Costello; Greenberg's Kant and the Fate of Aesthetics in Contemporary Art Theory

In: The Journal of Aesthetics and Art Criticism, Spring 2007, pp. 217-228.

今 村 美邦子

20世紀の芸術現象を読み解く上で道標とされたグリーンバーグのモダニズム論への修正はこれまでも為されてきたが、本論文では、特に彼のカント理解の不備を指摘し、彼の理論に影響を受けた著名な批評家フリード、クラウス、ド・デュヴ、ダントーの芸術論を検討している。そして、美の分析と美的理念の拡張などのカントの芸術理解の捉え直しを通して、それをモダンアートの理解へ適切にもたらしことを模索している。こういった試みは、今日では終焉したとも捉えられる美学という学問の活性化にも道を拓くものであろう。

キーワード：グリーンバーグのカント理解・現代芸術論の洗い直し・カント美学の復権

この論文は、もはや時代様式は通用せず短期間に多様な運動体が目まぐるしく交替していった20世紀芸術を読み解くに際し、いち早くその指南役としてアートシーンに力をふるったC. グリーンバーグ (C. Greenberg) の芸術論を初めとして、その批判的継承者であり今日の美術界で論客として光彩を放っているR. クラウス (R. Krauss) とM. フリード (M. Fried)、T. ド・デュヴ (T. de Duve)、A. C. ダントー (A. C. Danto) の芸術論をコンパクトに紹介している。しかも、ただ紹介するというのではなく、グリーンバーグの理論の影響力が絶大であったためそれを参照せざるを得ないという状況下にあって、彼らの理論がグリーンバーグの理論を中心としてそこからどれだけ展開し得たかが述べられている。そして著者D. コステロは、哲学・美学を専攻する者の立場から、グリーンバーグが自らの理論の根拠としているI. カントの『判断力批判』の

解釈を再検討することを通して、グリーンバーグによるカント美学の歪曲を指摘し、現代芸術論におけるカント美学の復権とその有効性を探ろうとしている。

まず、グリーンバーグのモダニズム論では、モダニズム芸術は、それぞれの芸術に「固有の本質・それ以上還元不可能なもの」(p. 218)へと内的に必然的に向かう企てと捉えられていたが、それは「美的価値へ向かう屈動性 tropism」(p. 218)でもある。さらに、芸術においてこの美的価値を獲得するための必須条件は、「媒体が特殊であること (medium-specificity)」, 特にモダニズム絵画の場合「平面性 (flatness)」であるとされているが、コステロは、グリーンバーグの芸術論の中核には、美的価値の追求と媒体の特殊性とが等価なものとして設定されていることを指摘している。グリーンバーグの直接の影響を受けたクラウスとフリードのうち、グリーンバーグ

によって「俗悪」というレッテルを貼られモダンアートから切り捨てられたダダやシュルレアリスムの再評価を試みるクラウスは、彼の芸術論を引き受けつつも批判的立場を取り、これらの作品だけでなくミニマリズムやランドアートも、媒体の特殊性を越え出ていく「不定形 (formless) へ向かう衝動」(p.219) を内包しているという。クラウスは、グリーンバーグが純粋に視覚に訴える視覚優位の作品を評価したのに対し、触覚・物質・水平性を強調することで、モダニズムの神話を崩そうとしているのである。これに対し、積極的にグリーンバーグの芸術論を引き継ごうとするフリードは、C. アンドレやR. モリスらのミニマリズムの作品が、その構造上観者なしでは成立し得ないことから「演劇的theatrical」であるとし、「墮落した」芸術として退ける。しかし、かかる作品は、壁や床に置かれるといった作品の伝統的空間を、対象と観照者とそれが設置される舞台空間という複雑な空間へ拡張したのであって、コストロは、作品の芸術としての成功あるいは品質を、空間を拡張しないということから引き出すことは出来ないとしている。

グリーンバーグは、カントを「最初の真のモダニスト」注) として取り上げ自らのモダニズム論の根拠としながら、その理解には、自由美と付属美との区別の不徹底さや、趣味判断の「無関心性」と心理的距離との混同などが見られる。それにもかかわらず、美術界の多くの論者は、彼のカント解釈を詳細な検討を加えることなく借用している。ド・デュヴも、カント美学を現代のアートシーンにとってアクチュアルなものにさせようとするが、コストロは、彼の理論のうちでは、「これは芸術である」という判断が「これは美しい」と

いう判断に置き換えられてしまっていることを指摘する。ド・デュヴによれば、「芸術」は一つの固有名詞であり、「これは芸術である」という判断は、芸術という一つの概念の下での対象を包括しているのではなく、芸術という名を判定された対象に授けることであって、「洗礼」(p.223) に似ているという。芸術という名を与えられるかどうかは、それが「候補的(candidate)」作品として範例的作品との「比較」(p.223) のうちから導き出されるにすぎないのである。芸術作品を「具体化された意味」(p.223) として捉えるダントーもまた、内容に対して形式が適合しているかどうかを問題にするが、「芸術は自然と類似してはならない」(p.224) と言うようなカントの論の読み違いが見られる。こういった理論の不備を指摘しつつ、コストロは、カント美学における、芸術作品が多様で複雑な仕方で観照者に引き起こす「美的理念との想像的関わり (engagement)」(p.225) に注目し、カントにとって、芸術作品が間接的に感覚的形式において理念を具体化する仕方こそ芸術美の判断の焦点であることを強調する。そのことを通し、反美的と捉えられるコンセプチュアルアートなどの再解釈が可能であるとし、袋小路に陥っている現代芸術論を打開しようとしているのである。

あまりにも多くの運動体がカオティックに推移した20世紀芸術の状況に直面し、18世紀にバウムガルテンやカントによって確立された美の学は、もはや今日何ら説得力を持たないように受けとめられ、その終焉論すら幅を利かせている。しかしながら、このコストロの言説に見られるように、1900年代の芸術現象の解釈としての現代芸術論における美学的基盤の脆弱さを洗い直しつつ、今日の状況下

での美の理論の有効性と適合性について、今後さらに広く掘り下げて論じられる必要があるように思われる。

注) C, Greenberg, Modernist Painting, (1960), p. 85, in ; Clement Greenberg : The Collected Essays and Criticism, vol. IV, (ed) John O' Brian, University of Chicago Press, 1993.